

Title	ニーチェの「遊戯」が意味するもの
Sub Title	Spiel' in Nietzsche
Author	鈴木, 威(Suzuki, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.82- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニーチェの「遊戲」が意味するもの

鈴木 威

ニーチェは、故郷を喪失した近代人にその失われた故郷を取り戻そうと努力し、その過程を実験的に生きた詩人哲学者である。しかし彼は、自由と孤独の近代的人間を一方の側に、また、古代ギリシャ人の自然観を故郷に仕立ててもう一方の側に置き、双方の側から同時に触手を伸ばして両者の結合を試みたため、彼の著述は、ある時は人間の、ある時は自然的世界のパースペクティヴの許に現われ、論理的明解さを欠き、しかも両者の触れ合おうとする瞬間の言葉は常に比喩的である。本稿では、そうした比喩の一つ、ニーチェの思索の頂点にしばしば現われる「遊戲」Spielの意味を、永遠回帰説にそってさぐってみたいと思う。彼は、世界の生成を「遊戲」として把握し、また人間の最高の創造を「遊戲」と規定することによって、「生成の無垢」という共通面において双方の歯車をかみ合わせようとしていたようである。「もろもろの偉大な課題に対処するのに、私は遊戲よりほかの仕方を知らない。遊戲こそは偉大な印として、或る本質的な前提である」(註¹)。

權力意志の概念によるニーチェの世界観、力 *Kraft* (＝エネルギー) に対する彼の洞察、キリスト教的神の否定と理性主義の否定とは、彼を、近世、中世、古典古代ギリシャを飛びこして、悲劇時代の古代ギリシャへと引き戻す。彼はヘラクレイトスの遊戲という概念を借りて、自分のディオニュソスという根本概念を理解する。「ヘラクレイトスが観ていたところのもの、即ち、生成における法、則と必然性に関するこの教説」(註²)は、ニーチェの出発点でもある。「世界はゼウス大帝の、物理的に表現すれば、火の、みずからの遊戲であり、一者はただこの意味で多者なのである」(註³)。

ニーチェはギリシヤ人にならって、永遠なる存在という形而上学的根本表象に固執するが、ただし永遠ということをも、不変としてではなく、創造と破壊の無限の繰り返しとして考える。彼は、知性では把握しえないこの「根源的一者」*das Ur-Eine* (註⁴)を、「『尽きざる産出的生一意志』 *Lebens-Wille* (註⁵)」として直観する。この意志こそ、存在の窮極的な、他に還元しえない本質的原理、一切の現象、仮象の源泉であり、万物を生み出すものとしてそのどれ一つの個物のうちにも現存して働く力、一切の可視物を生み出すエネルギーなのである。万物が流転する「この世界は、權力意志である」(註⁶)。従ってニーチェにおいて權力意志といい、生というも、ひとり人間のものではない。權力意志は人間的知性を超越した、しかしそれを内に含んだ生成の圧迫、動機を持たぬ衝動として、一個の存在者たる人間にも、他と等しく与えられている原理である。

世界そのもの、この根源的一者は、それ自身としては姿を見せず、ただ時空に有限な個物の集合、仮象的多者という仮面をもってみずからを顕現するにすぎない。即ち、存在たる一なる世界は、みずからのあり方である權力意志によって、存在者の総体たる世界として姿を現わす。この、根源的統一が多へ分解する過程は、ニーチェがショーペンハウアーに直接影響されていた頃の言葉でいえば、「全からの、絶対的無制約性からの個別化の原理、離反の原理」*Prinzip der Absonderung, der Lostrennung* (註⁷)である。生をむかばる世界そのものは權力意志に従って自己を個別化、客観化し、かくて時間と空間のうちに境界を持つ諸事物の集合としての現象的世界と化し、「大地」として我々の目に触れる。自然、歴史、認識、芸術のあらゆる分野にこの權力意志は内在しており、それらを躍動させている。それ故諸事物は、出沒、生成の運命を担わされている。諸事物の存在の仕方は、自他を区別する境界線の絶えざる破棄、しかるに境界そのものの絶対的破棄ではなく、境界線の恒常的移動、相手を圧倒して自己の勢力圏を拡げようとする不安定な動揺であ

る。こうして根源的一者たる意志は、自分自身一つでありながらそれを忘れ、諸事物の中で自己にそむいて自己と闘い、自己を誤認して自己を制圧しつつ、貪慾に形而上学的渴望を満たす。

個々の諸事物間では権力意志の強弱に従って、弱い事物は消滅し、強い事物がその分のエネルギーを吸収して増大し、相対的にその力関係を刻々に変化させているが、世界全体としての権力意志は、「その大きさを変えることのない……一定のエネルギー」(註8)である。そしてニーチェはニュートン流に、「エネルギーは限界と形態を持つものであるから、私はエネルギーの基体として絶対空間を信ずる」(註9)といつて、権力意志の分散する場を限界のあるものと想像している。

さてこうした諸事物の空間的動揺は何のためにあるか。生成の到り着くところは何処か。ニーチェは、世界がこれまで無限の時間を経過して来たものとの想定の下に、「世界が一つの目標を持っているとすれば、その目標はすでに達成されているに違いない。……総じて世界が停滞し凝固しうるものであるとすれば……とつきの昔にすべての生成を……終らせてしまっているはずだ」(註10)といつて、世界の生成には、ある平衡状態への収斂の可能性がないと断定する。彼は、無常に生成すること、世の外を志向する者に、その逃道をふさぐ。生成は今後も永遠に続けられなければならない。このように世界を、有限的空間の、無限時間の中の生成と考えるをえないことによって、次に、諸事物に分散したエネルギーの間の組み合わせが考えられなければならない。即ち、有限数の有限者は、永遠の中では、幾度でも同じ組み合わせで現われる可能性がある。「世界は、その生存の大々的なさいころ遊びを続けながらも、計算可能な一定数の結合関係を通過しなければならない」と仮定すれば、「無限の時間のうちでは、あらゆる可能な結合関係が……無限回達成されていたはずである。しかもあらゆる結合関係とその直後の回帰との間には、総じてなお可能なその他のすべての結合関係が経過したに違いなく、これらの結合関係のいずれもが同一系列のうちに生ずる諸結合関係の全継起を条件づけているのであるから、このことで、絶対的に同一な諸系列の円環運動が証明されているはずである。即ちそれは、すでに無限回反復された、また、無限にその遊戯を遊戯する円環運動としての世界に他ならない」(註11)。かくしてニーチェは、空間的動力としての権力意志と、これがころがる時間的軌道としての永遠回帰の二つの概念から、可能な限り客観的な世界像を組み立てる。このような世界は、「エネルギー恒存の原理」(註12)に従って生成する目標なき循環運動、初めもなく終りもない、原因もなければ結果もない、また、あらゆる瞬間が初めてであつて終りでも

ある、原因でもあれば結果でもある、そういう一つの充実した円環である。「循環運動は根源法則」(註13)として必然である。

II

神の死と共に、これまで人間のよって立つ根拠とみられてきた形而上学的、道德的な背後世界が取り除かれた時、上述の如き、あるがままの、目的なく流転する世界の姿は、人間にとって苦しみ種の種でしかない。世界の本来の姿、かつて幾度もあり、今もあり、また将来も等しくあるであろう世界の永遠の回帰は、もはやどんな偉大な人間も無視することの出来ない存在のニヒリズム、それ故「ニヒリズムの最極端の形式である。即ち、無(無意味なもの)が永遠に！」(註14)。十九世紀以来の歴史的ニヒリズムを現代人が克服出来るか否かは、それ故、この最極端のニヒリズムに耐えうるかどうかにかかっている。

ニーチェの説く諸説のうちで最も深遠にして包括的な永遠回帰説は、自然の宇宙論的、物理的必然性を教えると同時に、目的なきが故に人間にとっては苦しみ *Not* でしかないこの必然性を、自由に転回 *wenden* せんとする人間学的必然性をも教える。

ニーチェの著作に永遠回帰の思想がはじめて明確に表現されるのは『悦ばしき学問』においてであり、ここではそれが、人間を訓育する主題の許に述べられている。「最大の重圧——ある日、或はある夜、デーモンが君の最も孤独な寂しさの中へ忍びこみ、こう語ったらどうであろう。『お前は、お前が現に生き、これまで生きてきたこの生をもう一回、はた無限回にわたって生きねばならないであろう。……存在の永遠の砂時計は繰り返し巻きもどされ、——それと共に塵芥にも満たないお前もまた！』……——いずれにつけても、『お前はこのことをもう一回、はた無限回にわたって欲するか』という問が最大の重圧として君の行為の上にのしかかるのだ！或はこの最後の永遠な確証と封印以上の、何ものも望まないためには、どれ程君は、君自身ならびに生を愛さねばならないであろう！」(註15)ここには永遠回帰説が、人間に、最大の喜びをどうしても手に入れておかなければならないことを要求する倫理的な重さとしてあらわれている。しかも人間は今、永遠回帰説をつきつけられているが故に苦しんでいる。彼がもし喜びを手に入れたいなら、他ならぬこの無意味に回帰する世界の中にこそ、それを見出さなければならない。この循環論から決定的に抜け出すためには、彼は、今ここにあるがままの自分を祝福すること、そのためには今ここに自分が確実な存在の上で創造していることの確証がなければならない。

ここでニーチェは、この存在の確証をみずからの手で創造しようとする勇猛な獅子を登上させる。

Ⅲ

神を否定することによって、人間は、創造の主体が自分自身であることを再発見する。彼は、今やいかなる既成価値によってもしはられていない自由の精神、「われ意志す」*Ich will*の「獅子」の精神（註16）である。これは神に代って、みずから全世界の支配者になるうとする近代人の象徴、確固たる地盤を失ったために、みずからその地盤を作りあげようとしている近代的ニヒリストの象徴ととれる。彼は無意味な諸事物、断片であり偶然である諸事物の集積されている「大地」の上に独り置かれている。彼自身もまた、世界を限なく支配する権力意志の一断片として本質的に権力意志である。それは、単に今ある自分をそのまま保存しようとするだけの消極的な、生きることへの意志ではなく、他を圧し、自己を大きくしようとする権力への意志である。弱い自己をみずから消費し、より大きな強さと優勢を旨とする生の衝動、自己を克服してゆく自己存在、これが神から自由になった人間の、即ち創造者のあり方である。彼は善悪、美醜その他あらゆる人間的評価を絶して流れる大地の上にあつて、自分の価値を定立する者、目標なき大地に向つて自分の目標を立て、それに向つて常に新たな投企を敢行する者である。創造的意志は、「傷つきえないもの、葬りえないもの、岩をも突き砕くものとして」（註17）人間のうちにある。創造者には、ただ受けとつて順応すればよいような、既成の世界はない。宇宙の必然の中にあつて生成する諸事物も、彼にとつては敵意の偶然でしかない。彼はそれらに主意的に対処し、みずから最高の立法者として、一切の価値の尺度を新たに定める。前進する創造者の自己克服してゆく先は、勿論理想主義的彼岸ではなく、大地そのものである。彼は大地の上に、みずからの価値体系による帝国をつくり、そうすることで、生きていることの確証をつかみ取ろうとする。「君たちが世界と呼んだもの、それはまず君達によって創造されるべきだ。君達の理性、君達の形象、君達の意志、君達の愛が、それ自身世界となるべきだ」（註18）。しかし、こうして空間的に自由に自分の領域を拡張する獅子は、時間的にどの程度自由であり得るか。意志はその本来の姿として未来へ向けて意志するのは自由であるが、過去に対して意志は自由であらうか。自由であることを誇りにする獅子にとって、「あらゆる『あつた』*Es war*は断片であり、謎であり恐ろしい偶然」であり、「意志が過去を意志することが出来ない」限り、それは「最も孤

独な憂愁」としてとどまらざるをえない（註19）。「一切の『あった』を『私がそう欲したのだ』に作り変えること」をこそ「救済」と呼ぶなら（註20）、この救済は如何にして可能か。

獅子は、外来の偶然的、断片的運命を、自己の自由な必然的な運命のうちに包括してしまうことをこそ喜びとし、また、みずからの内なる意志を信じて、絶対的自由を獲得することによってみずから神の座につき、このことで存在の確証を得ようとしているものである。この獅子が、もし過去という「重石」をくつがえすことが出来ないとすれば、彼は挫折せざるをえない。自由な意志は、時間の前に最後の反抗を試みる。

獅子は、創造的意志として、主我的な時間の構造化を計る。即ち、過去、現在、未来という時間の区別とその統一は、実はすでに人間の意志体験のパースペクティブによるものである。世界の生成するところにある時間は、これに反して等質的であって、何ら意味を持たない。この等質的な永遠の時間に意味をもたせ、内容的に、過去、現在、未来ならしめるものは創造的意志である。「時間そのもの *Zeit an sich* とは無意味である。覚知する存在者にとってのみ時間はある」（註21）。創造的意志は、個々の時点において自己の現在のあり方を決すべく、脱自的に未来に先駆した目をもって、評価的に過去を整理し直す。これは創造的意志が、世界時間の無意味な過去、現在、未来を、未来の方から逆に走らしめて、過去へさかのぼらしめたことになろう。ここに、未来を意志する創造が過去を自己の過去となしつゝ、これを今この決断に意味づけ、過去を蘇らせることが可能となる。彼にとって過去はもはや恐ろしい圧迫ではなく、逆に、現在の決断内容を豊かにする跳躍台に変わる。強い権力意志は、過去をもその断片と謎から救い、みずからの生の支配下に組み入れる。従って、創造的意志にとっては、暴君的な過去に対しても自由でありえ、「意志は解放する。これが意味と自由についての真の数えである」（註22）という命題は、相変らず真理でいられる。

このようにして、獅子は、無常な世界の時空に散らばる断片であり謎である諸事物に積極的に対処することによって、それを自分の世界の時空の内に統一し意味をもたせることによって、それらが無の中に沈黙してゆくを防ぐ。彼自身が世界の諸事物の運命を支配するものとして、彼はみずから神の座につけるのも間近いのではないか。そうした眺には、彼は、存在の確証をみずから創り出したことになろう。しかし彼は、やはり時間の原敵に打ち当って挫折する。彼が世界の真の支配者であるためには、永遠の命を持っていない

ればならない。その命に限りある人間には、永遠に無意味に回帰する諸事物に彼の意味を付与することは出来ない。それどころか、限らない時間の前には、彼自身築いた意味ある世界が、彼の死後に、無意味な断片として無に帰す。世界時間の前には、あらゆる人間の意味が無意味であり、あらゆる冒険が徒勞に終る。獅子の、全体に化したが如き自分の世界は、実は相変らず、一つの割合大きい断片として、その偶然の性格を止揚してしまつたわけではなかつた。獅子はここに、改めて、「無意味なものが永遠に」という極限的「無」(註23)と対決しなければならぬ。もはやみずからのうちに全体を創り出せないことを悟つた獅子は、ここに挫折する。獅子は、束縛なきが故に、返つて住所不定の故郷喪失者で終る。「私に残されたものは何か? 一つの疲れた厚顔な心、一つの定からぬ意志、ぐらつく翼、一本の折れた脊椎だ。……私の故郷はどこだ? ……永遠の徒勞!」(註24)

IV

ここで挫折した獅子に残されているものは、獅子が生れた時と全く同じ二つの道具立て、即ち、相変らず無意味に生成する自然的世界の永遠回帰と、相変らず意味を探そうとする必然的 *notwendig* な、しかし苦しみを転回 *Wende der Not* (註25) しようとする人間の意志とである。

獅子の意志は、存在の確証を得んがために、みずから必然的なものとして、自然的世界の諸物を自己の必然のうちに組み入れようとして挫折した。ニーチェは、今度は全く逆のことを試みようとする。即ち、獅子をして、無意味に回帰する自然的世界こそ存在の確証を送るものだと思はせようとする。今やニーチェ自身、獅子より先に宇宙に飛び込み、獅子に、滅私的に宇宙の必然の中へ、この無意味に回帰する世界の中へ飛び込んでくることを命ずる。獅子はここに、今まで外に向けて使用してきた意志の創造的改価の刃をみずから向け、「われ意志す」の精神を、「われ在り」*Ich bin* の「子供」の精神(註26)に転化させようとする。存在の確証というただ一つの喜びを得んがために、獅子は、意志することの性格を変えようと意志する。しかし勿論獅子は、世界の、音をたてて流れる仮象的諸事物が、彼の存在を保証してくれるものではないことをよく知っている。今、改めて獅子が、この無常回帰する世界を志向するのは、その中に、無から救ってくれるものを探し出すため、そしてまた、それら仮象的諸事物をも一度に救うであろう宇宙の主人を探す

ためである。今や獅子は、盲目的に自己の小さな運命を主張することはせず、逆に、それを全的にくるんでくれる根源的運命の中に自己を没入させることによって、自己の断片的運命を完成させようと企てる。獅子にとって、今や最大の関心事は「われ在り」である。もし獅子が、無意味なものが永遠に回帰するこの世界の中に、永遠の存在、故郷、根源的運命、等々と名づけてよいようなものを実感した瞬間には、獅子は子供に変身するだろう。しかしそれまでは、獅子は獅子としてとどまる。

それにしても、ニーチェが獅子に先んじて直観した存在の世界の姿とは、どんなものだったであろうか。勿論その世界が、我々のすでにたどった（本稿第一章）世界と一つものであることはいうをまたない。しかしニーチェは、そこで物理的に演繹した世界を、改めて彼独特の神話的用語におきかえることによって、その後の議論をしやすくしている。即ち、ディオニュソス—アポロの世界解釈がそれである。

V

ニーチェは世界を解釈するに際して、それを、瞬間的な生成と永遠の存在とに分けて考えていた。しかしその際は、存在ということで、絶対不変の理念的の世界を考えていたのでは勿論ない。ニーチェの考える世界とは、生成せざるをえない存在、逆にいえば、あらゆる瞬間に存在を宿す生成ということになり、ニーチェはこの包括的に考えられた世界に、ディオニュソスの名を与える。「この世界とは、即ち、初めもなければ終わりもない巨大な力、……全体としてはその大きさを變ずることのない青銅の如くに確固とした力量、……諸力と力波浪の遊戯として一であると同時に多であり、……永遠に彷徨しつつ、……如何なる疲労も知らない生成として、自己自身を祝福しつつあるもの——、永遠の自己創造の、永遠の自己破壊のこの私のディオニュソス的世界……」（註27）。ディオニュソスは常に等しい量のエネルギーであり、世界の根底として存在そのものである。と同時に、ディオニュソスはそれ自身としては決して姿を見せることがなく、常に、仮象ないしは現象というアポロの仮面をつけてのみ姿を現わし、そして常にその仮面を更新してゆく。直接人間の目にふれる世界の生成は、それ故、ディオニュソスがめまぐるしくとりかえるアポロの仮面、即ち、ディオニュソスがもたらす仮象である。アポロはディオニュソスの化身として、ディオニュソスそのものであるともいえるし、しかしまたアポロは、ディオニ

ユゾスの一つの偽装として、ディオニュソスそのものではないともいえる。アポロはディオニュソスがあるから存在することが出来るが、また同時に、アポロがなければディオニュソスは、姿なき幽霊として、無におちこむ。ディオニュソスとアポロ、存在と生成、永遠と瞬間は、不分離の分離として世界を形づくっている。ディオニュソスのあるところ、そこには、いつもめまぐるしく生成するアポロの仮面がある。しかもディオニュソスは、「何かのために」この変身が続けているのではなく、ただ單純に自分のため、存在せんがために生成する。それ故世界の生成は、存在の最高の必然でありながらいかなる目的論も因果律も支配することのない、ただ偶然の衝動、自己目的々な運動として、子供の遊戲に比せられる。

世界の車輪、このめぐる車輪は、

目標また目標を掠めて過ぎる。

苦しみ——と口やかまし屋はそれと呼び、

遊戲——と痴人はそれと呼ぶ。

世界の遊戲、この気ままな遊戲は、

存在と仮象を混ぜる。

この永遠なる愚かなるものは、

われらを混ぜ入れる。(註28)

「存在の言葉」Seins Wort (註29) は人間の言葉のうちに移すことは出来ない。何故なら、人間の言葉は、個別化された諸事物間の相対關係を、また相対価値を言い表わすためのものだからである。しかしニーチェは、こうした人間の言葉のうちから、存在の現われ方を最も近似的に、言い表わす言葉として、「遊戲」を借りて来た。人間の言葉のうちでは、これが、最も手垢のつきにくいものと考えてのことであろう。

さて、この世界の遊戲こそ、根源的運命として、人間の運命を包んでいる窮極の地盤である。ニーチェはこれを最終的にファーストウ

ム（運命）と呼び、人間に、ファートゥムを愛すること *amor fati* を命ずる（註30）。

VI

獅子の「最後の意志」が意志するものは、「（わが）運命の上に一つの運命をたて……死して勝つ」（註31）ことである。即ち、人間は、ディオニュソスに会わなければならない、ディオニュソスの遊戲性そのもののうちに自分を投げかけなければならない。我欲を説いたニーチェは、最も高い次元での喜びを得るために、滅私を説く。

意志が単に、仮象的世界の中で、苦しみを転回するだけの原理で終れば、その意志は、常に無の敵意を現在にも含んでいることになる。即ち、「何か」を意志する限り、人間の立つ現在、その「何か」をまだ手に入れていないものとして、「それでないところのもの」というタンタロスの苦しみを味わなければならない。ディオニュソスの世界が、あらゆる現在点に存在の確証を送るものとすれば、未来を意志する者には、「世界に対してディオニュソス的に然りという」（註32）運命愛が理解出来ない。運命愛の要求することは、自己企投による「何か」への意志のことではなく、現在あるがまゝの世界への没入である。「これ以外にありえようがない」というディオニュソスの必然が、「何かのために」とあるという人間的必然を従え、両者が合致した時、人間は存在の確証を得るはずである。

子供へ生れ変らんとする獅子の「太陽意志」（註33）は、人間をも含めた地上の諸事物を統一し、かつ弄んでいるディオニュソスという輝く天空に向けて、自分を投げかける。「汝の高みへわが身を投げ入れること——それが私の深さだ！ 汝の清純さのうちにわが身を隠すこと——それが私の無垢だ！」（註34）必然を求めていた獅子は、みずからすすんで、ディオニュソスの遊戲性という偶然の中に身を沈める時、最も高い必然を手に入れることが出来る。ディオニュソスの必然は、人間的な必然と偶然を超越しており、それ故偶然とも呼ばれうる。

もともと意志は、必然 *notwendig* であると同時に苦しみの転回 *Wende der Not* であった。そして獅子の意志が「苦しみの転回」を強張する余り挫折したとすれば、獅子が子供に転化するためには、次には「必然」を強張しなければならない。そしてこの「必然」の最高の運命がディオニュソスの遊戲と一つものであるとすれば、人間は自由意志によってディオニュソスの遊戲に参加した時、みず

から最も必然的な運命に変わるはずである。

また人間の必然がディオニュソスの偶然に飛びこむ時、人間の意志はディオニュソスの愛に変わるはずである。何故なら、愛とは自己目的々であり、それ以外の何物をもはや意志しないという意志の自発性だからである。意志が何か一つの目標をにかけて意志する限り——これこそ獅子の意志の本質であつたが——、その意志されたものは常に前方に逃げ去り、従つて「今あるがままにあるものを意志する」という真の自由を手に入れることが出来なかつた。ディオニュソスを感じしようとする意志は、特定の目的を捨てなければならぬ。中心となるべき目的を捨てた意志、自己目的々となつた意志の具体的活動は、もはや獅子の「創造」ではなくて子供の「遊戲」である。逆にいえば、子供の遊戲は「何のために」という動機を持たない創造活動として、単に運動そのものを欲する自然的エネルギーとみなすことが出来、それ故ディオニュソスの自然的エネルギーそのものに触れている、ないしはその中に混入している、といえよう。子供の遊戲はディオニュソスの遊戲に密着している。

しかしこのような、世界存在に対する人間の存在の滅私的奉仕は、人間に意志そのものの放棄を、即ち、世界に対する傍觀的態度を要求しているものではない。逆である。世界存在そのものたるディオニュソスは、それ自身としては姿を見せることが出来ず、もろもろの事物の總計としてのみ姿を現わすものであるため、人間の五感に偶然触れる諸事物は、すべてディオニュソスの肉体の一部として、存在の必然の連鎖の中にあるものである。刻々と変わるそれら諸事物は、ディオニュソスがアポロの仮面を借りて現われる美しい仮象である。人間は、派手好みのディオニュソスのため、これら諸事物を權力意志で組みあわせることによって、さらに素晴らしい仮面をディオニュソスのために用意してあげなければならない。「私自身が永遠回帰の諸原因の一つである」(註35)。創造する權力意志とは、根源的一者としてのディオニュソスが、人間に、その目的のために付与した宿命であり徳である。それ故、人間があえて無為に墮そうとすれば、それは最高の意味での不道徳である。ただし、ここでの意志のパースペクティヴは、人間でなく世界の方へ移っている。人間はみづから無常で偶然的な諸事物の中へ飛び込まなければならない。諸事物は、決して輕蔑されるべきものではない。「何故なら、一切の諸事物は永遠性の泉で、善惡の彼岸で、洗礼をほどこされた」(註36)ものだからである。人間にディオニュソスの存在を教えてくれるものは、それら乱雑に積みあげられた諸事物である。人間はそれらを相手にすることよつて、その仮面の裏に、永遠の静かなデ

イオニュゾスを垣間見ることが出来るのである。ディオニュゾスは、あらゆる瞬間に永遠を用意して待っている。ディオニュゾスが現われる「瞬間」というのは、無限の時間の一部という不完全なものではなく、永遠の時間全体、即ち永遠そのものが通過する充実した点のことである。「あらゆる瞬間に存在は始まり、……中心はいたるところにある」(註37)といわれる所以である。人間は、偶然の諸事物と関わる限り存在の確証を得る可能性の中にいる。そして実際にその確証を受けているのが「子供」である。子供は、目で見たたり手で掴んだり出来る事物と真剣に関わりつつ、それら「一切の諸事物の上に」懸る「偶然という天空、無垢という天空、不慮という天空、放恣という天空」(註38)に立ち出でている。彼らは、最も近いもの、即ち時空に固定された諸事物に関わって、しかも最も遠いもの、即ち、それら諸事物の相互限界を常に無に帰せつつしかも限界そのものを常に保存している存在に向って、心を開いている。ニーチェはこのことを、ギリシャ人に即して書いている。「彼らは生きている術を心得ていた。外観、皴、皮膚に勇敢にも満足し、仮象を慕い、形象、音、言葉、仮象の全オリンポスを信じて生きることが苦しい！これらギリシャ人達は皮相的にして——深みに根ざしていた」(註39)。

獅子的創造の小さな自由から、遊戯する真の自由に達した子供の魂は、永遠に回帰する世界遊戯の莫々たる世界の場面に住まって、そこを故郷としている。子供は、獅子が求めて挫折したまさに同じ場所で、永遠の存在の確証を受けている。世界の偶然的遊戯が、獅子にとっては苦しみの種であるが、子供にとっては喜びの種である。それは子供が、ただ幼稚に、世界を信じることしか知らなかったことから生ずる皮肉である。獅子が地表で、水平運動的創造をして苦しんでいる間に、子供は地中と天空との間を喜々として遊戯している。その子供の姿は、大地の無常に耐えて深く地中に根をはり、ディオニュゾスに祝福されながら天空にそびえるブドウの木に似ている(註40)。

子供になろうと欲する獅子は、何よりもまず無常な大地への信頼から出発しなければならない。それは知性からの命令ではなく、挫折した果敢な権力意志の、必然的な、また苦しみを転回しようとする根源的生の衝動である。

成人してしまったニーチェは、失われた幼年時代を壮年以後に再びもとそうと努力した。「一切の身体が舞者になり、一切の精神が鳥になること……これが私のアルファでありオメガである」(註41)。子供は、はじめから現在しか知らない。子供は、未来を志

向するが故に現在に空虚さを感じる成人の苦しみをよそに、單純に現在にあり、しかも過去、現在、未來すべてを超越した永遠そのものを知っている。子供の知っている時間とは、およそ時間らしくない時間、無時間といえは無時間の、永遠といえは永遠の、およそ主意的時間構造の知ることがなかった時間である。ニーチェが、「時間が飛び去った」時間、「永遠の井戸」というように表現する時間である（註42）。その時間は過去、現在、未來を等しく含んでいるが故に、子供の、時間への自由は、獅子のそれより比較を絶して大きい。と同時に、子供には現在の瞬間しかなく、その意味では未來への無関心と過去への忘却の中にいる。子供は、こうした時間の飛び去った所で、全く我欲を持たずに、また一切の *Schuld*（責任、垢、罪）をまぬがれて遊戯している。それはディオニュソスの遊戯、最高の必然と最高の自由が一つになった運動である。子供の遊戯には、いかなる目的論も因果律も支配せず、ただ單純な生の衝動があるのみである。遊戯することによってのみ、人間は本來あるべきものとなることが出来る。遊戯こそはまさしく一切の仮象の突破であり、存在への深い洞察であると同時に、また仮象自身の弁明でもある。遊戯のうちには、いわば世界の根源的な遊戯が、即ち權力意志という形で一切を支配する世界の運動が反映している。

しかし成人がこの子供の遊戯を再び持統的に、我がものにすることは、狂気を除いては不可能であり——ニーチェは全く偶然に、晩年の十年間を狂気の中で送ったが——、普通は、ただ意識的創造のあい間に、瞬間的に、遊戯の状態を体験するにとどまるだろう。しかし、人間が、永遠に回歸する世界の中に組み入れられることを恐れず、「お前はこのことをもう一回、はた無限回にわたって欲するか」（本稿第二章）というデーモンの問に対して、「然り」と答える勇氣を持つためには、遊戯体験は瞬間的なもので充分である。ここに、ニーチェの永遠回歸説の、自然科学的教えと倫理的教えとの二重構造的分裂が統一されるように思う。「もし我々が、唯一無比なる瞬間に向って然りを斷言するならば、それによって我々は己れ自身に然りを斷言したのみならず、一切の存在するものに向って然りを斷言したことになる。何故なら、それひとつで自立しているものは、我々自身のうちにも事物のうちにも何ひとつ存在しないからである。ただの一度でも我々の魂の絃の如く幸福にふるえる響きを立てるならば、この唯一回の出来事を条件づけるために全永遠が必要だったのであり、——全永遠は、我々が然りを言うこの唯一瞬間において、よしとされ、救済され、是認され、肯定されているのだ」（註43）。

ニーチェは獅子に向って滅私を教えたが、彼にそうさせた根拠ともいふべき、彼自身のディオニュソスの直観の瞬間を、彼は次のよ

うに描写している。そしてこの「正午の時刻」は、遊戯の中心的事件である。

「太陽がツァラトゥストラの頭の真上に来た正午の時刻に、彼は曲って節だらけの一本の古木のそばを通りかかった。それは一本のぶどうの株のゆたかな愛に巻きつかれて、自分自身から隠されていた。……完全な正午の時刻に、木のかたわらに身を横たえて、眠りたくなった。……しかしツァラトゥストラは、眠りに入るに当って、自分の胸に次のように語った。——静かに！ 静かに！ 世界はまさに完全になったのではないか。……怖れよ！ 暑い正午は牧場に眠っている。歌うな！ 静かに！ 世界は完全だ。……彼は、黄金の幸福の、黄金のぶどう酒の、古い褐色の一滴を飲むところではないのか。彼の上をサッとかすめて彼の幸福が笑う。その笑い方は神のものだ。——何が私に起ったのか。聴け！ 時間が飛び去ったのだろうか。私は落ちるのではないか。聴け！ 私は落ちたのではないか——永遠という井戸の中へ。……ぞっとするような正午の深淵よ！」（註⁴⁴）。

註

註用は、特にごつとわらなう限る。Nietzsches Werke in drei Bänden, hrsg. v. Karl Schlechta, C. Hauser Verl., 1960 に於て。

註1 『この人を見よ』 II S. 1097

註2 『ギリシヤ人の悲劇時代の哲学』（以下『TZ』と略す） III S. 374

註3 『TZ』 III S. 374

註4 『悲劇の誕生』 I S. 121

註5 『ツァラトゥストラはかく語りき』（以下『Zar』と略す） II S. 370

註6 『権力意志』（以下『WzM』と略す） § 1067 III S. 917

註7 『意志の自由と運命』（ニーチが十九歳の時の学校論文） Nietzsches Werke, Historisch-Kritische Ausgabe, III S. 62

註8 『WzM』 § 1067 III S. 916

註9 『WzM』 § 545 III S. 456

註10 『WzM』 § 1062 III S. 458

註11 『WzM』 § 1066 III S. 704

註12 『WzM』 § 1063 III S. 861

註13 『世界の断片』（以下『UDW』と略す） Kröners Taschenausgabe II § 1328, S. 472

- ⁴¹ 『WzM』 § 55. III S. 853
⁴² 『おぼくおれ』 § 341 II S. 202 f
⁴³ 『Zar』 II S. 294
⁴⁴ 『Zar』 II S. 369
⁴⁵ 『Zar』 II S. 344
⁴⁶ 『Zar』 II S. 394
⁴⁷ 『Zar』 II S. 395
⁴⁸ 『UDW』 I § 133 S. 64
⁴⁹ 『Zar』 II S. 345
⁵⁰ 『WzM』 § 55. III S. 853
⁵¹ 『Zar』 II S. 511
⁵² 『Zar』 II S. 460
⁵³ 『Zar』 II S. 294
⁵⁴ 『WzM』 § 1067 III S. 916 f
⁵⁵ 『ハーゲルフライ公子の教』 より、『ケーテに寄す』 II S. 261
⁵⁶ 『Zar』 II S. 433
⁵⁷ 『WzM』 § 1041 III 835
⁵⁸ 『ト・ペ・リ・ン・ク・難解』 469、『最後の晩餐』 II S. 1248
⁵⁹ 『WzM』 § 1041 III S. 835
⁶⁰ 『Zar』 II S. 461
⁶¹ 『Zar』 II S. 414
⁶² 『Zar』 II S. 416
⁶³ 『Zar』 II S. 463
⁶⁴ 『Zar』 II S. 416
⁶⁵ 『ニーチェ対ワグナー』 II S. 1061
⁶⁶ 『Zar』 II S. 468

註 41	『Zar』 II S. 476
註 42	『Zar』 II S. 512
註 43	『WZMJ』 § 1032 III S. 893
註 44	『Zar』 II 512